FILE 04

上級農業経営
アドバイザー

井﨑敏彦

Plan.Do.See

データに隠された農家の強みを読み解く鳥取の若手農業経営者の父親的存在

日本海と秀峰大山をはじめとする山々にかこまれた鳥取県は、
米、野菜、果実に加え、畜産が農業の重要な一分野を担う。
全国有数の農業県を舞台に、井﨑敏彦さんが伝えたいメッセージとは?
データ分析と人づくりを重視する活動の真髄に迫った。

井﨑敏彦さんは現在66歳。鳥取大学農学部から鳥取県の農業職に進み、長年、農業改良普及員として活躍。その後52歳で早期退職し、当時、前例の少なかった農業経営コンサルタントとして起業した。「起業を志したのは50歳手前でした。このまま勤めると現場を離れる可能性もあり、それが自分らしい生き方とは思えなかった。長年手がけてきた農家をもっとサポートしたい。その想いが募り、第二の人生を踏み出しました」

独立後は鳥取県内外の酪農、畜産、野菜・稲作農家と契約してコンサル業務に邁進。日本政策金融公庫鳥取支店からの誘いで農業経営アドバイザーの資格を取得した後、県内外の公庫支店の課題解決サポート事業を中心に幅広く経営コンサルを行っている。

データの集計・分析で農業者の思考を手助けする

井﨑さんのコンサルティングの特徴は、データ重視。いきなり牛舎や農場を見てまわることはしない。依頼を受けたら、決算書や出荷成績、生産・管理データなどできる限りの情報を入手し、それらを集計・分析して課題を整理したうえで、農業者を訪ね、話をする。

独自のスタイルを確立した原点には、若い頃の経験があった。農業改良普及員一年目のことだ。技術指導のため養豚業者を訪問するも、県から派遣された若い人間の話などなかなか聞いてはもらえない。そこでコンピューターに精通していた井﨑さんは、3,000頭近い肉豚の出荷成績をパソコンを使って集計・分析し、その結果をもとに提案を試みた。返ってきたのは、「あんたのことは信用できんが、データには従うしかないな」との言葉だった。「私自身、農業の専門家でもないのに技術支援をすることに違和感をもっていたので、この一件はすごく合点がいきました。以来、農業者と話をする際はデータの集計・分析が最も効果的と考えるようになり、一目でわかるデータ作成や要点を絞った企画書の作成にも注力していきました。

農業者のデータというのは数字だけが存在し、思考するのが難しい状態なんですね。そこに手をかけ、加工して、可能な限りグラフ化（見える化）することで、農業者自身が思考しやすいように手助けをする。それがアドバイザーとしての私の役割なのだと考えています」

牛舎に入らないことにも井﨑さんなりの考えがある。例えば、酪農経営において個体乳量は季節や産次などさまざまな要因によって変化するが、“現在”の牛舎をいくら見てもその変化は見えないからだ。「牛舎に入るのは、農業者と課題を共有したあと。そこでは、データと聞き取りによってどんどんイメージの膨らんだ自分のなかの牛舎と現実との違いを確かめるのもひとつの目的です。比較対象があると課題は明確になります。牛舎を見てもデータの説明がつかないときは、建物の周辺環境に目を向けるなどアプローチの仕方を変えて、データと現場の因果関係を読み解きます」

創業当時5頭だった別所畜産の管理牛は、今では常時2,000頭を超える。

井﨑さんが創業時から現在までサポートを行っている別所畜産の牛舎にて代表の別所貴史さんと。

軌道修正を的確に図れるのもデータ分析のメリットのようだ。

アドバイザーの最大の役割は考える農業者を育てること

データを重視する一方で、井﨑さんはコミュニケーションも重視する。経営者が心を開くことで本題に迫ることができるからだ。

「コンサルティングでは相手の話をよく聞くことが大切です。しかし、こちらから話しかけなければ何も始まりません。私の場合は、まず周辺を観察して農業者の身近な話題から入っていくようにしています。経営者の奥さんや従業員が同席していたらその方々にも声をかけ、先代とお会いしたら昔話をすることも。『課題の背景にはそれなりに理由があるんだな』『皆さんここで頑張ってこられたのだな』と、経営体の過去に想いを馳せるというのは大切なことだと思います」

そうしてお互いの心の距離が縮まったころ、データ解析で浮かび

トマト栽培をベースに農福連携に取り組む齋尾農園代表の齋尾達城さんと、栽培ハウスにて。農福連携は井﨑さんにも初めてのケースだった。

上がった農業者の優れた点、もっと言えば“農業者が気づいていない良さ”について話をする。「夏場に乳量が落ちていない」とか「牛の状態が揃ってきている」とか、「ここ5、6年離職者が出ていない」とか。内容はさまざまだが、データが示すこれらの現実のなかにこそ、農業者の日々のこだわりがあり、課題解決の糸口もあるという。

「反応ですか？　もちろん笑顔がこぼれますよ。と同時に『あの対策がよかったのかな?』と、農業者自身の気づきが言葉となってあふれてくるのも、ここからです。本題に入ると、数値化・グラフ化により明確化された課題を前に、農業者は一歩も二歩も踏み込んだ思考を重ねていきます。データに命を吹き込むのが私の仕事だと思っています。大切なのは、上から目線で提案するのではなく、一緒に考え、経営者の答えを待つこと。経営者の心の変化が未来をつくる原動力になります。我々の最大の役目は、“考える農業者”を育てること、そのための環境を個々のスキルを生かして提供することではないでしょうか」

サポートの熱量も上がる若手経営者のチャレンジ魂

近年、農業は地方創生の中核を担う産業として注目を浴びている。その立役者が、若手の経営者だ。取材では、井﨑さんが車を走らせ、3つの若い経営体を巡ってくれた。

和牛の“ふる里”ともいわれる鳥取県中部地域に位置する「㈱別所畜産」は、スタッフが20代中心のフレッシュな大規模畜産農家だ。代表の別所貴史さんは12年前に農業高校を卒業後に就農。当時5頭だった飼養牛は、いまでは常時約2,000頭を管理するまでに拡大。県内外の酪農家等から毎年3,000頭以上の牛を購入するなど、地元農家からも頼られる存在になった。

井﨑さんとの付き合いは創業時から続く。サポートの要となっているのが、井﨑さんがいまから10年前に、別所畜産のためにデータベースソフトで作成した「牛群管理システム」だ。「データを蓄積・集計・分析し、牛の管理に役立てる必要があります。そのために現場の要望を取り入れ、常に細やかな改良を加えています」と井﨑さんは語る。

別所畜産ではスタッフのスマート農業に対する意識も高く、目下、IoTで牛の行動を観察する「U-motion®」を活用し、「牛トレーサビリティ」実施に向けた準備も進めている。そして、別所さん自身も独自の販売ルート（中国、四国、近畿、九州）を開拓することで、さらなる事業拡大を井﨑さんと相談中。次の

大切なのは農業者と一緒に考え導き出される答えを待つこと

齋尾さんのA型事業所「一般社団法人TIES」は、地域の福祉就労の受け皿に。

フェーズの挑戦が始まっている。

別所畜産を後にして向かったのは、10年前にUターンでトマト農園を開園し、「農福連携」に取り組む「齋尾農園」。代表の齋尾達城さんは福祉事業に携わった経験を生かし、就労継続支援A型事業所を開設。今後は通年に近い栽培・収穫が可能なネギ・ブロッコリーの栽培も取り入れ、生産規模拡大と安定的な労力確保を目指す。

福祉の現場を体験した齋尾さんにとって、農業人口の減少と高齢化に悩む農業と、働く場の確保が難しい障がい者とのマッチングは肌で感じられる課題であった。

「井﨑さんには事業計画書の書き方をはじめ、本体の農業経営をしっかり固めることで事業全体の価値が上がることや、経営安定のために契約栽培は6割以内にとどめることなどたくさんのアドバイスをいただきました。理想がひとつずつ形になっている。使命感とともに大きなやりがいを感じています」

現在、約90頭の乳牛を管理するリバーズファームでは、井﨑さんと共に6次産業化の取り組みを模索している。

井﨑さんにとっては「農福連携」は未経験の案件だったが、齋尾さんの熱意に応え、必死で事業化への道筋を探っていった。

「若者がUターンして鳥取で農業を始め、前職で得た福祉事業の知見を持ち込んでくれる。とても嬉しかったから精一杯支援しました。でも、最後はやはり本人の資質がものをいうんじゃないかな。本人にモチベーションがないと高いハードルは乗り越えられません」

リバーズファーム代表の川本潤一郎さんと。井﨑さんは今回の取材で初めて同牧場の牛舎に入った。

現在、齋尾農園へはA型事業所から30人ほどが通ってくる。そこに関わる人流が新しいコミュニティを形成し、新しい産業が生まれる日もそう遠くはなさそうだ。

本物のファミリーのように信頼できるパートナー

最後に、井﨑さんは、アットホームな雰囲気が地元から親しまれている酪農牧場「リバーズファーム」へ案内してくれた。代表の川本潤一郎さんの母と井﨑さんは同級生。川本さんのことは昔から子どものように可愛がっているという。

「井﨑さんのデータに基づくアドバイスは質が高い。公的支援や6次化の成功例など新しい情報も豊富で、そこからうちにあったやり方を一緒に深く考えてくれます。地域の連携を重視するのも井﨑さんの特徴ですね。『牛の糞尿処理は耕種農家のほ場をお借りしないとできない。地域と離れたら日本の農業は成り立たない』。話が出るたび、肝に銘じています。言葉にできないことを井﨑さんが言語化してくれたり、いまさら人に聞けないことも井﨑さんには聞けたり。ずっと二人三脚でやってきたので阿吽の呼吸があります」と川本さんは顔をほころばせる。

信頼の絆で結ばれたファミリー感漂う関係は、別所畜産や齋尾農園でも目にした光景だ。それは、おおらかに、愛情深く、周囲を巻き込んでいく井﨑ワールド。

「意欲ある若手農業経営者が思う存分力を発揮し、柔軟な発想と行動力で地域産業も引っ張っていく。若い力と共に鳥取から日本の農業を変えていこうと思います」

| Profile |

井﨑敏彦◎鳥取県出身。鳥取大学農学部農芸化学科卒業後、鳥取県職員となり、農業大学校職員、農業改良普及員などを経て、2008年に早期退職。経営コンサルタントとして起業し、畜産経営を中心にコンサル活動を展開。